

2020年度 第9回 ライフステージ事例検討会 報告書	
日時	2021年3月2日(火) 17時45分～18時45分
開催施設 参加者数	金沢大学2名、富山大学0名、福井大学2名、石川県立看護大学5名、信州大学3名、 石川県立中央病院14名、公立能登総合病院0名、石川県済生会金沢病院0名、金沢医療センター4名、 公立松任石川中央病院9名、小松市民病院3名、 富山県立中央病院3名、高岡市民病院0名、市立砺波総合病院4名、富山県済生会富山病院2名、 金沢医科大学氷見市民病院0名、厚生連高岡病院0名、富山労災病院3名、 長野赤十字病院3名、諏訪赤十字病7名、福井県立病院10名 会場参加 計74名 その他 個別のオンライン参加 計38名 合計112名
テーマ	「がん終末時の場の希望を叶えるために」
発表者	KKR北陸病院 山瀬 勝巳さん
【意見交換内容】	<ul style="list-style-type: none"> ・患者が自宅療養を前向きにとらえられるようになったきっかけ、そこから再度入院するという決断に至った時のスタッフの思いについて質疑応答があった。 ・コロナ過で面会ができない状況での入退院の参考になったという意見があった。 ・「在宅の看取りは家族にも決断が必要であり、病棟看護師や訪問看護師も生きるサポートをしていると思う。家族は弱っていく姿を見るのが怖い」「看取れるかな」「看取りをするのがつらい」という考えをもったと思う。こういってとき、看護師が出来る援助(業)はどういったことがあったか」という問いに、訪問看護師として話を聴くこと、本人のケアと、家族の話を聞くことが半分～2/3の割合を占めていたと回答された。 ・他の病院では、コロナ禍で工夫していることとして、「1回10分/日の面会を許可しており、家族によっては面会が長くなることもあったが、そこは辛い気持ちのまま帰っていただいた。ホスピスなどでは、予後が短くなると面会が緩やかになっていた。」と回答がされた。 ・家族のみならず、医療従事者も心を痛めており、様々な工夫をしている。環境を整える以外に、家族に寄り添って1人ではないことを不安な家族に声をかけ、見離されていないことを伝えることも必要といった意見が出た。 ・家族の心情に沿うことが大事であることや、「短い関わり」でも積極的に話をするすることで、家族は見慣れた顔に安心することから、面会への支援として、一瞬の家族との繋がりを考えさせられると言った意見も聞かれた。
ミニレクチャー	「コロナ禍のがん終末期ケアを考える」